

東海地方にゆかりのある シニア世代の皆さんのページです

小栗重吉

佐久島に生まれ、15歳で養子となり現在の半田市に移り船乗りに。29歳のとき乗組員13人と江戸へ航行した帰途、嵐に遭い漂流。アメリカ商船に救助され5年後に帰国したのは重吉を含め2人だけだった。重吉はその後、亡くなった仲間の供養塔を建立。新城藩の池田寛親(ひろちか)が重吉から漂流の様子などを聞き取り、「船長日記」にまとめた。

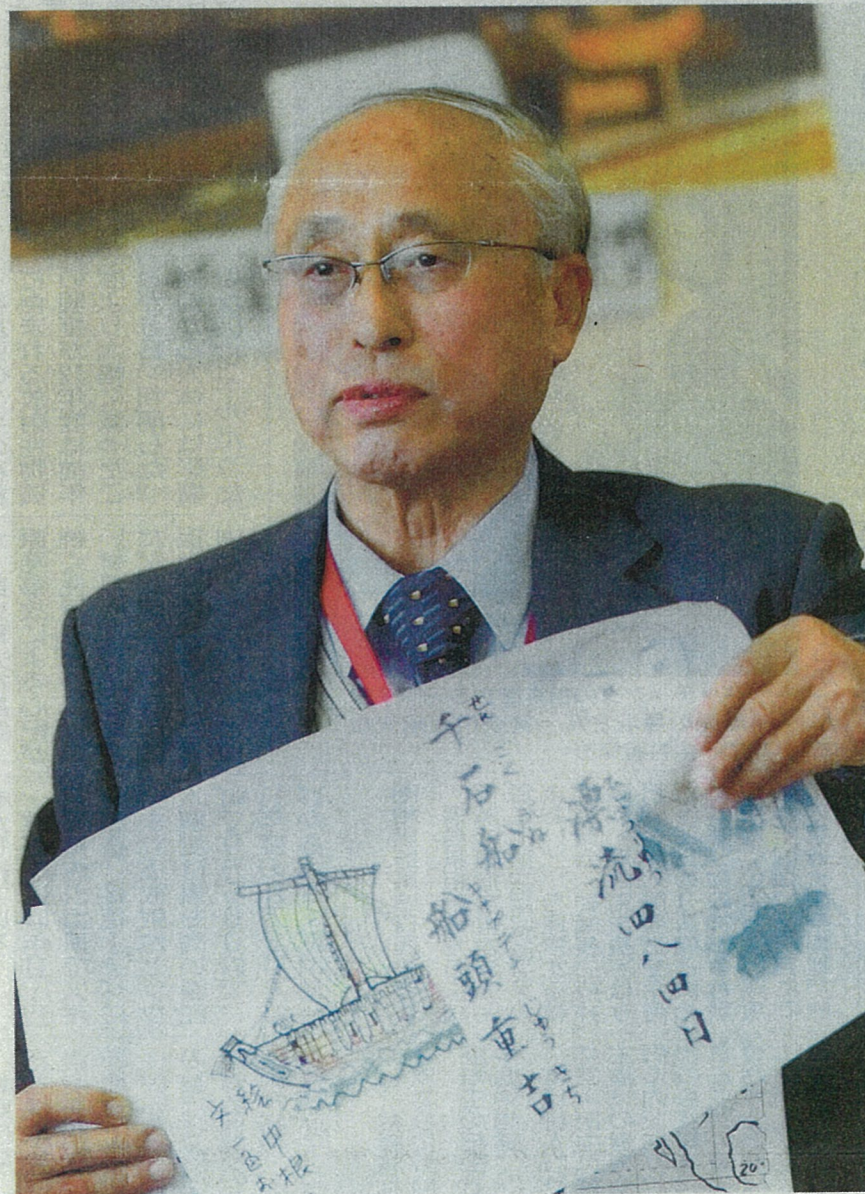
水野さんが重吉と出会う

三河湾に浮かぶ愛知県西尾市の佐久島出身で、太平洋を484日間漂流したとされる江戸時代の船頭、小栗重吉(1785~1853)の生き方を学ぶ道徳の公開授業が1月21日、同市立佐久島中学校(全校生徒10人)で開かれた。「仲間思いで、みんなを励ました」「生きることを諦めなかった」。次々と発言する生徒たちをうれしそうに見守っていたのは、講師に招かれた「海の男 船頭重吉(キヤブテン重吉)の会」の水野克宣会長(71)＝西尾市一色町。今年は重吉が漂流してから200年という記念の年で、船頭重吉の会はさまざまな事業を計画している。



西尾「海の男 船頭重吉の会」会長
水野 克宣さん(71)

「漂流200年」で町おこし



道徳の公開授業で、生徒に重吉を紹介する水野会長＝佐久島中学校提供

中学で生き方学ぶ授業も

たのは、自動車販売会社に勤めていた35歳の時。知り合いの古文書研究家から、1年4カ月にも及ぶ漂流を生き抜いた重吉の話を知り、魅了された。「佐久島の風土が重吉を育てた」が、持論の水野さんは何度も佐久島に足を運び、重吉の生い立ちを研究している。重吉の会は12年4月1日に生まれた。きっかけは、西尾市立図書館が11年11月に開き、水野さんが講師を務めた講演会「佐久島が育んだ『船頭重吉の日記』」。郷土史への関心からか、定員60人のところに76人が詰めかける盛況ぶり。その中には、同会副会長を務めるえびせんべい会社社長、三矢誠さん(58)と画家の中根正治さん(75)、事務局を引き受けた元旧一色町議、本郷照代さん(58)＝いずれも西尾市在住＝がいた。三矢さんは「こんなすごい人物が地元出身とは思わなかった。面白いと思った」と振り返る。意気投合した

4人は「重吉の名前を地域の人にもっと知ってもらおう」と動き出す。まず、重吉の物語を3枚のせんべいプリントした「重吉せんべい」を作り、地元のイベントなどで配った。次に漂流200年を町おこしにつなげよう」と、4人が発起人となり重吉の会を設立。現在、会員は西尾市を中心に新城市や名古屋市などの35人。

◇ ◇ ◇
会では現在、中根さんが中心となり、重吉の紙芝居を制作中だ。5月までに完成させ、絵本の読み聞かせ活動をしている会員が小学校や保育園で披露することになっている。また、世界最長記録といわれる漂流484日を12年7月、ギネスブックに申請。現在、認定待ちという。申請を担当した本郷さんは「過性の取り組みではだめ。持続的、発展的なものにして町おこしにつなげたい」と話す。

◇ ◇ ◇
いま最も力を入れているのは、今年11月16、17の両日に佐久島で開く「船頭重吉サミット」だ。生誕地の西尾市、15歳のとき移り住んだ半田市、「船長日記」の原本が見つかった新城市の3市合同の交流会を開く計画で、4人はサミットのプログラム作成や宿泊施設



200年の記念事業に向け話し合う「船頭重吉の会」役員(左から)水野さん、中根さん、本郷さん、三矢さん＝西尾市一色町で

ペンとカメラ
丸林康樹 58歳